

目次

まえがき	廣田 收	1
『源氏物語』にとってウケヒとは何か	廣田 收	3
——物語の深層に神話がある——		
桐壺更衣の花の比喩	浅尾 広良	33
——「女郎花・撫子」の表現性——		
当代読者が『源氏物語』に透かし見る同時代史	星山 健	57
——引用される伊周・詮子・為平・斉信——		
源氏物語の巻と巻名の機能性について	原 豊	71
——主に享受史の視点から——		

『源氏物語』、異界からの侵入

——平安時代物語、『無名草子』からの逆照射——……………野村倫子 …… 91

月入れたる真木の戸口、紛れ歩く若君

——『源氏物語』の場面とその構成——……………村口進介 …… 113

『源氏物語』玉鬘十帖における求婚者たち

——『うつほ物語』あて宮求婚譚から考える——……………勝亦志織 …… 131

源氏物語における色彩のある衣装描写

——男性たち——……………井野葉子 …… 151

『源氏物語』「見えない人びと」の主題論的考察

——情報伝達と演出——……………辻 和良 …… 171

長編物語に呼び込まれる兼雅と涼

——『うつほ物語』の成長段階を見据えたアプローチ——……………本宮洋幸…295

海山の饗もてなし応

——『伊勢物語』八七段の表現——……………亀田夕佳…215

待つ女と待たない女

——『伊勢物語』から『平中物語』へ——……………山下太郎…233

《対談》

物語研究の論点はどこにあるか……………廣田 收…251

あとがき……………辻 和良…285

執筆者紹介……………291

まえがき

最近の物語研究は、膨大な研究史の重みを踏まえなければならぬ一方で、テーマや論証の手続きの細分化・専門化はますます進んでいるという印象があります。ところが、一方では、ややもすると挑発性を持った意欲的な考察や、「個人的な読み」の感じられる論考が、思いなしか少なくなっているようにも思えます。

それには近時、特に「文学」というものの概念が揺らいでいることや、分析理論の深化に伴って、テキストというものに対する捉え方が、研究者によって異なり多様化していることが関係しているかもしれません。

いったい読み方には、普遍的で絶対的なマニュアルなどというものは存在しませんから、いざ論を立てるとか、考察を進めるといっても、どこから、どこへ、どのように漕ぎ出せばよいのか、大海原の前に途方に暮れる方がおられるかもしれません。いや、正直に言えば、馬齢を重ねただけの私とて、今もってあれこれと「迷い」続けています。答えのない問いを抱えると、きつとそうなるでしょう。調べ始めても行き詰まり、袋小路や行き止まりに入り込むと、もう一度元に戻って考え直すしか手がありません。とは言えまた、何が立脚点であり、何をめざすのか。行きつ戻りつすることになり、問いに答え

るためには、また新たな問いが必要になる、というふうに苦しみ続けることとなります。

そこで、平安期の物語を対象として、現在最前線で活躍しておられる研究者の方々に御願ひし、大学生や一般の読者の方々を念頭に「古典文学の面白さ」をめぐる、物語を読む楽しさに溢れた魅力的な問題提起や大胆な仮説を御示しいただこうと企てたのが本書です。

そのような企画の意図を踏まえて本書をお読み下さると、論考ごとに「切り口」の違うことがお分かりになると思います。問題の設定の仕方、めざす目標の置き方、何よりも論じ方などが、それぞれに違ってきます。

それでは、この中でどのような読みに興味をお持ちになるでしょうか。あるいは、もっと違った読みができるのではないかとお考えになるかもしれません。

いずれにしても、本書がこれからの新たな読みを拓き、つかげとなるのであれば、これ以上の喜びはありません。

また、各論考と併せて、本書の後半に編者二名の拙い「対談」を掲げて、研究に対する率直な考えを示しておりますので、ぜひとも御覧いただき、本書名に掲げた「いかにその物語は面白いか」という問いについて御検討いただく機会となれば幸いです。